ドローイングシマ
激しく、美しく生きる

自分と向き合う時間を

夏の盛り、20日ほど前に誕生祝いとして贈られたエレキギターを演奏中に突然逝ってしまったかまち君。母、千鶴子さんを自宅に訪ね、愛息の死後40年以上を経て思うことを聞いた。

―仕事と三人の子育てを両立しながら法政大文学部（通信教育部）を卒業した千鶴子さんは今年、82歳になりました。

父の戦死で家計を担うために、JTの前身、旧日本専売公社に入社しました。大学の勉強をしていると次男は膝に乗り、長男のかまちも右腕をつかんでまとわりつく。「ママの手は鉛筆の匂いがする」とかまちが言い、「ママはデブだ、お寝坊だ」と続けるので「かまち、それを書けば詩になるのよ」と言うと、「ぼくはいくらでも書ける」と意気込み、次男と掛け合いのようにして詩を書き続けました。「素晴らしいね」とおだてやらせるのが上手い母親でした。

朗らかでにぎやか

―著書『かまちの海』（文藝春秋）を読むと、祖母と両親、弟妹に囲まれた、にぎやかな家庭が思い浮かびます。

口は遅かったけど、鉛筆がちゃんと持てない1歳半から夢中になって描いてました。ある日、トカゲを追いかけて縁の下に潜ろうとしてランドセルがつっかえて入れず大騒ぎ。動物の動きを真似して弟妹を笑いさせたり、朗らかでにぎやかな子でした。

―改めて作品を拝見すると、物事の本質を見抜く冷静な観察力に驚かされます。

夕飯の支度中に「ママ、人間にとって一番難しいことは何だと思う」と尋ねるのでいろいろ答えると「降参かい。答えは何も考えないことだよ」と言ったんですけど、初めは意味がわからなくてぽかーんとしてしまいました。そんなことが何度もありました。

先日、美術館でギャラリートークをしたとき、教師になったかまちの同級生が来てくれました。「どこにもいると思っていたかまち君のような子どもに、まだ一人も出会ってないんです。かまち君は特別な才能をもっていたんですね」と58歳になった彼女が話してくれました。

今、気づく幸せの足音

―煌（きら）めく感性やひたむきに生き抜いた日々を心揺さぶる作品群に刻み付けたかまち君。突然の逝去から40年以上の歳月が経ちました。

20年ほどは「かまち」と発することもできませんでした。

81歳で亡くなったご主人が好きで庭に植えたという侘助（わびすけ）が一枝活けられた花瓶を前に、かまち君との思い出を語る母の千鶴子さん

難病の夫を支えるため、気功の勉強で北京を訪れ、山中の満天の星空の下で遠い日のかまちと向き合えたことがきっかけになり、「かまちの海」を書けるようになりました。

この頃思い出すのは、家の真ん中にあった階段を上り下りする子どもたちの足音。かまちはつま先で歩く癖があって「とんとんとん」。次男は「だっだっだっ」、幼い長女は両手両足を使う「ばたばたばた」。若かった私は「うるさーい」と叱りましたけど、元気な子どもたちが立てたあの足音は、今になって「幸せの足音」だったのだと気づきました。どなたとも共有できる幸せ感だと思ったのです。

歳月を重ねると、「作品が全く違って見える」と話す来館者がいます。作品を眺めながら自分と向き合う時間を何度でも持っていただけたら、うれしいです。かまちが皆さんの中で生き続けるということですから。

『愛、その日』

山田千鶴子

はるばる北海道から長期滞在に我が家へ着いたばかりの「おはなおばさん」を囲んで、私と母と三人、賑やかにお茶を飲んでいた。

そこへ外から声がする。桃の花を抱えた母の友達の和江ちゃんの笑顔があった。「桃の花のおすそわけ。お節句は終わったけど。大きな束を「よっこいしょ」と下ろした彼女は、「あら、おはなちゃん―　北海道から飛行機で？」と歓喜の声を上げる。おはなちゃんも「嬉しいわあ」と「うわぁスゴイ匂い！こんなに！」。各々の感動の声が花祭りの盛り上りになった。

和江ちゃんは手際良く枝分けをし乍ら「かまち君がちっちゃかった頃、ちっちゃな手にマジックペンを持って、馬やらライオンやら怪獣をするする描くの、茶菓子代わりに見ていたものよね。二歳とは思えないって。うちのお父ちゃんなんか、かまち君の描いたスバル360の車が何台も連なって道を曲がる絵が気に入って、家の壁に貼ってね。この子は天才だって」と口調を高くして明日出直すと上らずに帰って行った。

そこへ、当のかまちが玄関から廊下を渡って走って帰ってくる。〝ハイカラおばさん〟の異名をとるおはなちゃんは、かまちをいきなりハグをする。

早速、北海道のバター飴やホワイトチョコを両手に持ったかまちが「六年生の卒業式の練習で、僕達五年生は早帰りでした」と丁寧に説明をして二階に消えた。アイヌの木彫りのハンガーや、紺と白の手織りの布など土産の品々について聞きながらコーヒーに飲み換えていると「おいしそうな匂いだ」とかまちが下りてくる。

「おはなさん。カラヤンのベートーヴェンを聴きませんか」かまちが誘う。「ママも どうぞ」。八畳間に据えられたステレオの前の、かまちが並べた籐の椅子へと案内する。

「畳の部屋なので、音響がいまいちなのです。すみません」と丁寧に挨拶してから、かまちは「交響曲第六番ヘ長調、作品68番　田園。ベルリンフィル……」と説明する。

スピーカーから静かに音が流れ出し、やがて高く響いて広がると、おはなちゃんは目を閉じ、気持ちよさそうに全身を揺らしだす。桃の花もカラヤンに誘われて、一際匂いを放っているようだ。かまちは早くも、ベルリンフィルを統括しているカラヤンになっている。

「夕食の本格派カレーの準備をしなければ」と私は気づいてそっと席を立った。

かまちに土下座されて買うことになったステレオ。高価だからと、「当分夕食はおじゃ〜にします」と宣言したのに、うっかり三日目に母は好きなすき焼を用意してしまった。「僕は食べない」とかまちは夕食を断固拒否した。音楽会が終ったおはなちゃんに母が話すと、「かまちさんは本質的に純粋なのよ」そう感動して、首を何度も頷き返し、涙ぐんでくれた。

「かまちさんは本当に素敵。私幸せだわ。毎日二曲ずつ聴かせてくれるの」と高揚する。

母がお風呂の焚き付け用に丸めてキッチンの隅に小山にしているのを見つけたおはなちゃんは、「何てことするの」と丁寧に広げ始め、「これ写楽でしょ。こっちは女神でしょ」と一枚一枚丁寧にしわを延ばしだす。「ルネッサンス期の美の女神はボッティチェリですよね」と、かまちを振り返る。

母が「だって毎日毎日、何十枚も描くものだからこうしてるの」と苦笑いして説明する。「そしてね」と、「そのままじっとしていてってかまちに言われて、絵を描くために観察される人になるのよ、毎日のように」と母が話す。おはなちゃんは「まぁ、私がなりたいわ」とどこまでもかまちの味方だ。

手を休めずに丸めた絵のしわを延ばすはなおばさんは、「北海道へ行く少し前だったわね。かまちさんが幼稚園の頃、ママとメーデーの帰りに魚屋で鯖を一本、新聞紙に包んで抱えて持ち帰ったことがあったわね」と思い出して笑った。

「中華鍋で、丸のままそっと鯖を揚げて、形をくずさないように、そっと身を食べて頭と骨を残すように」とかまちに宣告されたのだ。

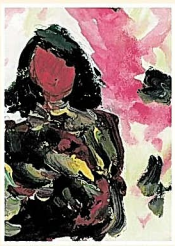
食べる前から食べ終わるまで、サバの変遷をスケッチするかまちを見ながら、皆で固唾を呑むようにそっと箸でつついて食べたことを語った。

「何でもかまちさんの成長をずっと見たいわ」と。

クラシックに心酔していたかまちが、中学生になった春休み、不意に大音響のロックをかけて、家中を震撼させたことがあった。「ママ、そんなに嫌がらないで。僕がきっと、民謡の好きなパパ、シャンソンの好きなママ、歌謡曲の好きなちゃんちゃん（祖母の呼び名）と、ジャンルの違う人が皆、満足するようなロックを必ずつくるから」と延々と語ったものだった。

日々、呼吸をする如く、描いた絵と言葉を膨大に残して逝った彼の、色褪せない一説。

「すばらしい事をすばらしいって言葉を使わないで言い表す。
それが、やるべき事の比較的大きなものの中のひとつでしょう」
それは愛ですか……。
今も私の生きる大事な課題のひとつとなっている。



千鶴子さんが描いた自画像